

氏名（本籍）	やま もと ゆき こ 山 本 幸 子 （山口県）
報告番号	甲第24号
学位の種類	博士（健康福祉学）
学位記番号	健康福祉博甲第24号
学位授与年月日	2021（令和3）年3月17日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当（課程博士）
学位論文題名	看護学生のストレス対処へのプロセスと教育方法の検討 ～首尾一貫感覚の縦断的变化を通して～
論文審査委員	主査 教授 田 中 マキ子 副査 教授 横 山 正 博 副査 准教授 佐々木 直 美

博士論文要旨

論文題目 看護学生のストレス対処へのプロセスと教育方法の検討
～首尾一貫感覚の縦断的变化を通して～

看護学生は、専門職教育課程の途上にあり多種多様な経験が準備されるが、社会人基礎力の低下やコミュニケーション力の低下が指摘されている現代の若者にとって、多大なストレスを受ける場でもある。看護学生のストレスとして、実習記録物、教員・指導者との関係、知識・技術不足などが報告されている。こうしたストレスは、避けることができず、むしろストレスに対処する力を備えることが必要となる。

これまで経験してきた事のないストレスを受けるであろう看護学生の対処方法を検討するには、アントノフスキーが示す Sense of Coherence（以下、SOC とする）から捉える事が従来から指摘される課題解決に有効と考える。

まず、看護学生のストレスの所在を社会人基礎力の影響から検討した。社会人基礎力に影響する要因は、実習中の経験は負の体験となり、ストレスとなりストレスコントロール力の弱さや、チームで働く力の低さが明らかとなった。

看護学生のストレスとSOCとの関係や、影響因子である性格特性（特性不安、統制の所在）・

3次元モデルにもとづく対処方略（TAC-24）を明らかにするために縦断的調査を行った。3年課程の看護専門学校1年次生（587名：うち回答者298名）と2年次生（594名：うち回答者271名）に、2年にわたるコホート研究を行った。

看護学生のSOCは1年次から2年次にかけて有意に低下し、2年次から3年次にかけて緩やかに回復していた。1年次から2年次に、多くのストレスがかかっていたと推察する。そして、SOCと特性不安は負の有意な相関関係にあり、統制の所在は有意な正の相関関係があった。これらの性格特性は外からの刺激で変動することはないが、行動変容を起こすことでSOCが成長することの示唆を得た。また、学年毎によって対処方略の違いがあったが、高学年ほど多様な対処方略が取れるようになっていた。対処方略として、「カタルシス」「気晴らし」の変化はなかった。

以上を踏まえ、ストレス対処方略をより良く促す教育方法として、「一貫性の経験」「過小負荷と過大負荷のバランスの経験」「結果形成の参加の経験」に介入するプログラムの重要性が示唆された。作成したプログラムは、日常的な内容を取り上げており、改めて一貫した環境で一貫した教育という基本的なことに立ち返ることができる内容で構成した。このプログラムを活用することにより、看護学生のストレス対処力を促進させる可能性がある。

Abstract

A Study of the Process and Educational Methods for Stress Coping of Nursing Students : Through longitudinal changes in the sense of coherence

Nursing students are in the process of professional education and are prepared for a wide variety of experiences, but it is also a place where they are subjected to a great deal of stress for today's youth, who have poor basic social skills and poor communication skills. It has been reported that nursing students are exposed to stress such as practical training records, relationships with teachers and supervisors, and lack of knowledge and skills. Such stress cannot be avoided; rather, students need to be equipped with the ability to cope with these stresses.

The sense of coherence (SOC), a core concept of Antonovsky's theory of health generation, is considered to be "stress coping ability". It consists of three senses: graspability, processability, and meaningfulness. In order to clarify the process of nursing students' stress coping, I examined SOC of nursing students.

First, I examined whether the stress of nursing students comes from the lack of basic skills of working adults. Nursing student stress was related to unpleasant events during training and weak

stress control and week team skill among the basic skills of working adults.

A two-year cohort study was conducted on first-year students (587 students; 298 respondents) and second-year students (594 students; 271 respondents) of a three-year nursing school.

The SOC of the nursing students decreased significantly from the first year to the second year, and recovered slowly from the second year to the third year; we infer that they were under a lot of stress from the first year to the second year. And there is a significant negative correlation between SOC and trait anxiety, while a significant positive correlation was found between SOC and locus of control. These personality traits do not fluctuate with external stimuli, but the results suggest that SOC can increase through behavioral change. In addition, there were differences in coping strategies among the grades. The older the grade, the more diverse the coping strategies. "Catharsis" and "distraction" were not used as coping strategies.

Based on the above, "experience of consistency," "experience of balance between underload and overload," and "experience of participation in outcome formation" were revealed the important factors for the educational program to better promote stress coping strategies.

I made the program which covers everyday content and was designed to allow students to go back to the basics of consistent education in a consistent environment. This program has the potential to promote stress management skills in nursing students.

審査結果

本研究は、看護学生が抱える種々のストレスにどのように対応・対処するかについて明らかにし、その過程を支えるための教育方法を検討している。

本論文は4章で構成されている。第1章では先行研究の検討。第2章では、3年課程2年時制の看護学生を対象とした調査から、看護学実習において変化する力を明らかにした。第3章では、ストレスに影響する性格特性やストレスへの対処方略について、学年進行における変化から明らかにし、第4章総合考察では、本研究から明らかとなったストレスへの対応・対処についてどのような教育方法が求められるかについて検討している。

博士論文の審査基準に照らして、本論文を評価した。

1. 副論文の作成：副論文として「看護学臨地実習が社会人基礎力に影響を及ぼす要因」日本看護学会論文集 第49回、2019年 査読付き を確認した。
2. 研究課題の明確化：看護学生のストレス対処方法について、A. アントノフスキーが提唱した Sense of Coherence（以下、SOC）から捉えることが具体的介入方法を導くとした仮説が設定され、研究課題の具体と意義が明確に示されていた。
3. 先行研究の適切な検討：看護学生に関するストレス対処に関する先行研究の検討から、「看護学生に影響する諸要因の関係仮説」が導かれ、本研究課題の独自性・新規性について、適切に述べられていた。
4. 研究方法の適切な選択と実施：「看護学生に影響する諸要因の関係仮説」に基づき、看護学生のストレスとSOC、各影響因子との関わりが、2年にわたるコホート研究として行われ、学年進行に伴う変化や性格特性との関係等、多岐にわたる分析が適切な研究方法により実施されていた。
5. 新たな知見の提示と学問発展への貢献：看護学生のストレスは、行動変容を引き起こすことがSOCの成長を促すことと相関関係にあることが明らかとなり、「一貫性の経験」「過少負荷と過大負荷のバランスの経験」「結果形成の参加の経験」等への教育方法が、ストレス対処方略として重要であることが示唆され、看護学生のストレス研究に対する介入方法の具体に関する知見を進歩させた。
6. 文章作成能力：論文全体の体裁並びに文章表現等は、概ね整っていた。

最終試験では、本研究の成果と課題等に関する質問に対して、適切な回答が得られた。

以上の所見を総合して、山本氏は博士論文審査及び最終試験に合格したものと認める。